

魅力あるライフスタイルの構築と発信 目指すは《二つ上のまちづくり》

産業構造が深く関与する人口問題

早くも何度目かの夏日を記録した6月下旬の東京から、空路訪れた釧路市は、晴天でありつつ昼間でも摂氏15度前後で推移し、まるで高原か、東京の秋を想わせるような、爽やかな気候だった。

釧路市は、夏季の平均気温が摂氏20度以下、真夏日は年に1日あるかないかという、北国・北海道の中でも、ひととき冷涼な気候である。それは釧路の沖合を寒流(親潮)が流れているからだとされる。また釧路市は、特に夏場に海霧が頻繁に発生する「霧の街」としても知られる。これもまた、暖かく湿った南風が寒流によって冷やされて生まれる自然現象とされる。

後に詳細を述べるように、かつて《寒い》と言われた釧路市の夏の冷涼さは、今や釧路エリアの夏季観光の目玉の一つにもなっ

ている。

「以前はよく《寒い》と言われ、地元で暮らすわれわれも『なるほど世間からすると釧路の夏は寒いのか』と(笑)、何となく納得していたものです。しかし、最近はそれをポジティブに《涼しい》と言い換え、釧路の夏は『寒い夏ではなく、涼しい夏なんですよ』と発信した途端、避暑で長期滞在してくださる方が増え始めたのですから、マーケティングというのは面白いですよね」

のつけからそのように明るく口火を切ってくれた蝦名大也・釧路市長は、実に表情の豊かな方である。これまで市政ルポ・シリーズでは延べ300人近くの市長への取材を敢行してきた。この中でも、蝦名市長の表情の豊かさはトップクラス。言葉の端々に、またよく動く表情の明るさに、実にポジティブな雰囲気満ちている。

北海道東部(道東)の太平洋岸に位置する釧路市は、平成17年10月11日、旧釧路市・阿寒

えびなひろや
蝦名大也
釧路市長



町・音別町の1市2町の合併により、新生・釧路市の歴史をスタートさせた。合併後の面積約1363km²は全国の市町村の中で第7位(市では6位)に当たり、広大な面積の市町村が多い北海道内でも第3位の広さとなる。合併前の面積は旧釧路市地区が約221km²で、旧阿寒町地区が約740km²、旧音別町地区が約401km²だから、旧釧路市に比較すると約6倍になる。



国立公園指定30年目の釧路湿原は日本の宝



人口は平成29年末現在で約17万3200人強（合併時は19万人強）だが、都市化が最も進んだ旧釧路市地区への集中傾向が続いており、旧阿寒町地区および旧音別町地区では人口減少化が比較的目的立つ。

「旧釧路市・阿寒町・音別町を合わせたエリア人口のピークは昭和55年の22万7000人強でした。当時の釧路市周辺地域は戦後すぐの昭和20年から東京オリンピック直後の昭和40年まで、雄別炭鉱・尺別炭鉱などの炭鉱景気であった人口が急増しています。これらの炭鉱が閉山になって、一時人口増加は鈍りましたが、今度は水産業や臨海部の工業地帯の発展などでピーク時の22万人台に突入したわけです。その後は、水産業や工業などの地域経済低迷で、札幌圏や東京圏などへの人口流出が急増し、現在に至っているわけです」（蝦名市長）

もちろん、その背景には少子高齢化に伴う人口減少という要因もあるわけだが、釧路市の場合、これまでの人口増加と減少化の直接的な要因は「ほとんど、産業構造との兼ね合い」（蝦名市長）から生じていた。そしてそれは「人口減少に悩む多くの地方都市に共通する現象であるはずだ」と蝦名市長は続ける。

「国や大都市圏から見れば、人口減少化の最大要因は少子高齢化ということになるでしょう。しかし、実は戦後

の人口急増時代も含めて常に、地方の人口問題は、直接的には大都市圏への一極集中と歩調を合わせる形での、雇用の場の多寡の問題に左右されてきたと言えます。逆にいえば、地方は常に中央に人材を輩出し続けてきたわけです。その点をきちんと踏まえないと、地方都市の人口減少の抑制に向けたスタンスを誤る恐れがあると思います」

国家戦略と連動する観光振興ビジョン

さらに「地方都市が中央に人材を輩出し続



氷都・釧路の冬の名物・蓮花結氷（正面は海鮮市場やインフォメーションセンターなどの複合施設MOO）



ラムサール条約で護られる釧路湿原の主役たち(タンチョウとエゾシカ)

るライフスタイルを構築し、発信していくしかない。実際、釧路市ではそれを目指してさまざまな事業を行っています」と語る。

今回のルポのタイトルにもある「一つ上のまちづくり」こそは、その釧路市ならではの魅力あるライフスタイルのイメージ核といえるだろう。

う。そして「一つ上のまちづくり」を推進する原動力となるのはエリアの豊かな自然環境を活用した「①観光振興」であり、釧路市に自然発生的に構築されてきた「②自然と共生する釧路市ならではのライフスタイル」の発信だといえる。

まず釧路市が現在精力的に実施している「観光振興」について、そのあらましをご紹介します。釧路湿原国立公園（釧路市など1市2町1村にまたがっている）と阿寒摩周国立公園（釧路市など1市10町にまたがっている）がエリア内にあるという事実だけでもよく分かるだろう。

釧路湿原は昭和55年に日本初のラムサール



マリモの生息地として世界的に知られる阿寒湖



条約の登録湿地となり、昭和62年に国立公園となった。ここで改めて気づくのは、釧路湿原がラムサール条約の登録湿地となった年は、釧路市の人口がピークに達した頃でもあるということだ。炭鉱全盛時代に続いて水産業や工業などの地場産業が急成長を遂げるととも

けてきた歴史については、あの文部省唱歌の代表的な作品『故郷（ふるさと・高野辰之作詞）』の3番の歌詞をみれば分かります」と蝦名市長。なるほど『故郷』の3番を紐解いてみると「志を果たして、いつの日にか（故郷に）帰らん」とある。『故郷』が文部省唱歌に採用されたのは大正3（1914）年だから、100年以上も前から、地方の人は中央に働きに行くという構造が、国民的に「当然のこと」と認識されていた事実が改めて分かる。

蝦名市長は「人口減少は現実問題として仕方のないことではあるものの、それに少しでも抗しようと思うのであれば、逆に地方に人を集める方法や、その地域ならではの魅力あ

釧路市

(北海道)

市 政 ル ポ

に、人口が右肩上がりに増えていった過程では、例えば日本列島改造論など、日本中の空閑地を産業用地ととらえる考え方が幾度も議論され、多くの地域でそれが実践されてきた。そのことの是非はともかく、「今になって先人に感謝したいと心から思うのは、よくぞこの釧路湿原を、いわゆる産業立地的な観点からは邪魔ともいえる広大な湿地帯を、ほぼ手つかずのままに残していただいた、ということなのです」と蝦名市長。

日本全国に存在する湿地帯面積の6割を占めるとされる釧路湿原(約18ha強)がほぼ手つかずの形で残されていることの奇跡は、実際、現地を歩いてみると誰もが実感するに違いない。シカやヒグマが闊歩^{かつぽ}し、タンチョウをはじめとする水鳥たちの楽園は世界的な宝と言っても過言ではない。

また世界で唯一の大型球状マリモの生息地として知られる阿寒湖は、亜寒帯性針葉樹林で形成された見事な原生林に周囲を覆われた自然の宝庫で、将来的な世界遺産の候補にと、地元では期待している。

「同時に、阿寒湖畔には北海道の先住民族・アイヌの人たちの最大の集落である『阿寒湖アイヌコタン』があります。そこでは今もアイヌ伝統の自然との共生に基づく暮らしを体験することができ、日本初のアイヌ古式舞踊専用劇場(阿寒湖アイヌシアターイコ)もあります」(蝦名市長)

釧路市では、昨年度末に策定した「第2期

観光振興ビジョン」に基づく各種の観光振興施策を、今年度から実践し始めている。

その「かなり強い追い風」(蝦名市長)になっているのは、釧路市が「観光立国ショーケース・モデル3都市」(観光庁が昨年1月に選定)並びに、「国立公園満喫プロジェクト・8国立公園」(環境省が昨年7月に選定)に、それぞれ選ばれていることだ。

どちらも、2020年東京オリンピックを一つのターゲットに日本政府が目指している、外国人旅行者のいわゆるインバウンド対策の目玉とされている事業で、両プロジェクトに同時選定されている単独自治体は、釧路市だけである。



釧路川河口部の幣舞橋は市街地の象徴的景観の一つ

目玉は都市的環境と自然の共生

ではなぜ、釧路市が国の両プロジェクトに選定されたのか？ その理由と秘密は、観光振興ビジョンのキャッチフレーズの一つ『また来たい、釧路という異国』に付された、「近代的な産業港湾都市のすぐ背後に原始の名残をとどめる自然を擁する釧路のまちは、日本の中の異国です」という説明文が、如実に物語っていると言えるのではないだろうか。

同時にこの都市的環境と大自然との共生環境が基盤となった釧路市民の暮らしこそは、冒頭にご紹介した「一つ上のまちづくり」の源泉であり、その「一つ上のまちづくり」はそのまま、釧路市ならではのライフスタイルの発信でもあるのだ。

ちなみに「第2期観光振興ビジョン」は、次を示すごく一部の概要で分かるように、前出の両プロジェクトへの取り組みも含めた、非常に幅広い内容になっている。

【釧路市が観光振興に取り組む2つの柱】

◆観光振興は釧路市における産業振興の柱であり、観光産業はリーディング産業と位置付ける。

◆市民にも観光客にも心地よい魅力的な地域づくりを通して、釧路市の地域創生を図る。

【釧路市の観光が目指す将来像と目標】

◆みんなが担う、みんなが育てる観光産業により、持続可能な自立型の地域経済の実現

を、将来像として目指す。

◆平成29年度～39年度の目標経済波及効果は約500億円。

【目標とする市場】

◆既存市場―首都圏市場と道内市場のシェア拡大(国内市場)、来訪実績がすでにある東アジアからのインバウンドの拡大(海外市場)。

◆新規開拓市場―経済発展の顕著なアジア圏の新興国、欧米豪圏の特に富裕層の顧客獲得および観光消費額の増大化。

【将来像や目標を達成するための主な取り組み】

◆食の魅力づくり／MICE産業の強化／地域ブランド構築／魅力的な地域づくり／広域連携強化／人材確保・育成／観光マーケティング・プロモーション強化／観光推進体制の形成・確立／観光インフラ整備・拡充／などなど。

こうした各種戦略を推進するに当たり、釧路市が市民や市内事業者、経済団体などに訴えている最重要事項の一つは、「釧路市のオール体制で観光振興に取り組もう」ということである。

釧路市ならではの

「ひとつ上のまちづくり」

「まあ、そういう計画や戦略ということになると、裏付けとなる数字や目標となる数字がどうしても必要になる。もちろん数



釧路湿原北部に水面が広がる塘路

字は大切ですが、私がいう『一つ上のまちづくり』は、実は数字に換算できないモノを大切にしていこう、という意味なのです。昭和55年の調査では、釧路市民は60%程度しか、地域の暮らしに満足していなかった。それが今では80%以上の市民が満足している。そういう数字を見ればやはり嬉しいですよ(笑)。とにかく多くの人が愛着を持って暮らしていると。その事実が重要なのだと思います。

そして企業であれば、自分たちに足りない技術を持っている会社とM&Aを実施すれば、欲しいものが手に入ることでもある。しかし、都市経営という観点からすれば、

地域内に今あるものを大切にして、活用して、磨き上げて、新たな価値観を見出していくことでしか、足りないものを補うことはできない。マイナスをプラスに転じる。例えば寒いと言われていた夏を、涼しい夏とポジティブな表現にしていくなか(笑)「蝦名市長」

釧路市は、この「涼しさ」を生かして不動産業やホテル業者の民間事業者で組織する「くしろ長期滞在ビジネス研究会」(以下、研究会)と連携しながら長期滞在事業を推進してきた。

釧路市では、4日以上以上の滞在を長期滞在(ちよっと暮らし)と位置付けており、ここ6年

釧路市

(北海道)

市 政 ル ポ



「阿寒丹頂の里」は、インフォメーションセンターも兼ねた複合施設(シカ肉なども買える道の駅、温泉施設など)

間続きで、北海道内では長期滞在者の人数及び延べ滞在日数ともに1位となっている。中には年間数カ月に亘る滞在をしている方もいるほどだ。

「釧路市がちよつと暮らしを推進するようになったのは、平成17年度ごろです。天気予報を見たけど釧路の気温が間違っているのではないかと、温度計が壊れているのではないかと、このような問い合わせが度重なり、これはひよつとして、釧路の夏の涼しさはウリになるのではないかと考え、問い合わせを一元管理できる担当窓口を作りました。大胆な発想の転換が功を奏しました(蝦名市長)」

釧路市では、長期滞在者が市民と同様の条件で市内の一部公共施設を利用できる等のサービスを受けられる「くしろステイメンバーズカード」を発行している。また、研究会では滞在物件の供給やインターネット等による情報発信やさまざまなPRを行うとともに釧路の歴史や自然、文化等を学ぶ講座を開催するなど、過ごしやすい環境づくりや「くしろファン」となってもらえるような取り組みを進めており、これらが滞在実績の増加につながっているようだ。釧路市では現在、平成19年度に策定した「総合計画」(平成20年度～29年度実施)を継承し、さらに次の10年を見据えたまちづくりの新たな指針となる「釧路市まちづくり基本構想」(平成30年度～39年度実施)を策定中だ。



市民踊りパレードに参加する長期滞在者たち

今年6月時点の「たたき台」を見せていただいたが、釧路市がこれからの成長戦略を推進するリーディング事業と位置付け、「人口ビジョン」や「創生総合戦略」をも踏まえた前出「第2期観光振興ビジョン」を基盤に据えている上に、基本方針の柱の一つとして「自然と都市とが調和した持続可能なまちづくり」が掲げられている。阿寒湖・釧路湿原にタンチョウやヒグマ、マリモリまでを擁する大自然が、24時間稼働の国際貿易港にして、国際バルク戦略港湾(穀物)にも選定されている重要港湾・釧路港を核とする近代的な港湾都市と表裏一体の関係にある釧路市ならではの、「一つ上のまちづくり」が、どのような形で実現していくのか。今後の展開がとても楽しみである。

(取材：文＝遠藤隆／取材日 平成29年6月28日)